

二〇〇五年四月二十四日、「足尾に緑を育てる会」によって、第十回春の植樹がおこなわれた。その日は気持ちのよい春の晴天で、千百人もの人がきて、四千五百本の木が植えられた。

年々歳々、人が多く集まるようになり、植林するハゲ山の火燧沢緑の砂防ゾーンは人で埋めつくされたような雰囲気である。それとともに、運営も難しくなってきた。

植林地までは急な階段を上っていかねばならず、しかも一度に人が殺到するので、手にスコップや苗木を持っていたのでは危険である。そこで基盤工事をするために国土交通省が建設したリフトを使うことになり、資材は一度に上げてしまう。スコップには名札を張り、あとで自分のものをピックアップしてもらうのだが、あまりにも人が多いので、人とスコップとが出会わない。結局、誰のかわからないスコップを使い、そのスコップは持ち主がわからないまま置いていかれる。自分のスコップをついに手にすることができず、現場に置いていってしまった人には、おわびをしなければならない。会に残されたスコップは来年ピックアップしてもよいし、会としては無駄にしないことを約束する。そうではあるのだが、本当に申し訳のないことだった。

会としては、スコップの装備はまだ十分ではない。寄付してくれる人も、どうしても苗のほうに目がいってしまうのである。責任をとるというわけでもないのだが、私は自分でスコップを三百丁ぐらい寄付することにした。

状況変化、問題次々と

来年は手ぶらで植林地まで登ってもらうことにしたいのであるが、来年からはリフトが使えなくなる予定だという。苗木やら土やら肥料やらスコップやら、会のメンバーが担ぎ上げるにしても、限界がある。植林活動自体は軌道に乗ってきたとはいえ、状況が変わっていくので、問題が次々と発生する。

一番怖いのは、滑落などの事故である。老若男女とりまぜた参加者なので、中には上まで登るのが明らかに無理そうな年配の人もいる。その人のためにも別の場所に植林地を確保しなければならないだろう。しかし、植えられるのは基盤整備がすんだ場所でなければならず、どこでもよいというのではない。

今回の植林では、幸い事故らしい事故はなかった。一度だけ救急車のパイポウを聞いたが、山に登らず下にいた人が貧血で倒れたということであるらしい。

すべてボランティア

地元の人が多いスタッフは、前もっての資材の運搬から、当日の交通整理から、昼食のトン汁づくりから、本当によくやっている。当然のことながら、すべてボランティアである。参加する人が多くを学んで帰る一日となっている。

植林地一帯を管理する国土交通省の小島隆所長が、二枚の写真を見せてくれた。一枚は植林活動に取りかかる以前の十年前の火燧沢緑の砂防ゾーンで、草木一本生えていない、保水力ゼロの荒涼としたハゲ山である。足尾の典型的な風景といってよい。もう一枚は、現在の同じ場所だ。山壁の形はそのまま、表面が緑に覆われている。

この十年の成果は、確実にあるのだ。そもそもその場所は製錬所から排出される亜硫酸ガスで表土が汚染され、永久に草木は生えないだろうと予測されていた山である。私たちがとっている方法は手で一本ずつ木を植えるという人海戦術だが、遅々とはしていても確かに歩んでいるといえるのだ。